

国際交流基金助成事業報告書

薬学研究科 薬科学専攻
博士前期課程 2 年次生
加藤 将貴

1. はじめに

私はこの度、大阪薬科大学国際交流基金の助成を受けて、2019 年 8 月 4～8 日にカナダ・モントリオールで開催された The International Society for Neurochemistry and the American Society for Neurochemistry (ISN-ASN) meeting 2019 に参加し、自身の研究成果の発表を行ったので、ここに報告する。



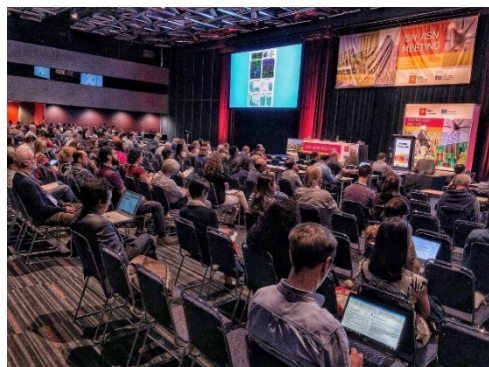
モントリオールの風景

2. 国際神経化学会について

神経化学とは、神経細胞だけでなく、グリア細胞も含めた神経系の発生・発達やシグナリング、さらにそれら神経系が疾患に与える影響などを分子・細胞レベルで探索する分野であり、神経化学の最も根底に存在する研究である。神経化学分野の研究は古くから行われており、日本においては 1958 年に、「第 1 回 神経化学懇話会」(後の日本神経化学大会)が大阪で執り行われた。世界各地で独自に発展を続けていた神経化学研究を取りまとめ、国際的に発展させることを目的として 1965 年に発足されたのが、今回私が参加した国際神経化学会 (ISN) であり、今年の ISN-ASN meeting 2019 はその第 27 回大会である。ISN の大会は 1967 年から 2 年に一度開催されており、各地域の関連学会であるアメリカ神経化学会 (ASN)、アジア・太平洋神経化学会 (APSN)、ヨーロッパ神経化学会 (ESN) が主体となって開催地を決定する (2017 年はパリ、2015 年はオーストラリア、2013 年はメキシコ)。

3. ISN-ASN meeting 2019 の様子

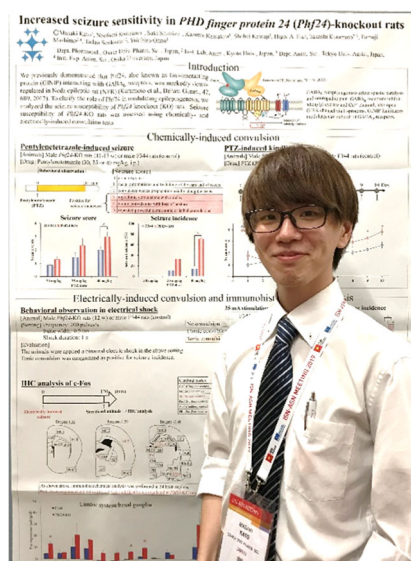
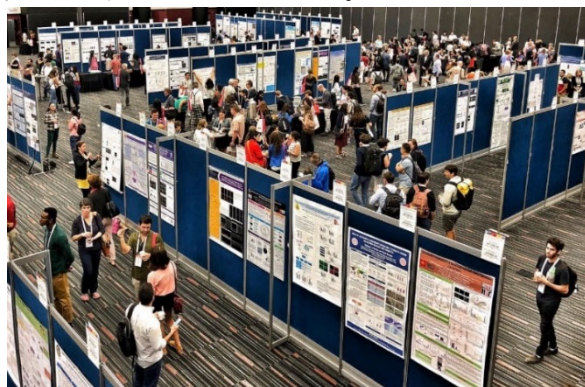
学会の会場はモントリオールの国際会議場 Palais des congrès de Montréal で、地下鉄の駅である Place-d'Armes station とほぼ直結している。本学会では、オーラルセッションのシンポジウムやレクチャーが並行して開かれていた他、大ホールにおいてポスター展示も行われていた。カナダでの開催ということもあり、欧米からの参加者がほとんどであったが、アジアやアフリカなどからの参加者も多くみられた。各セッションでは、神経化学研究の最先端を担う研究者たちが、活発に意見交換や討論を行っていた。



オーラルセッションの様子

ポスターセッションはオーラルセッションの合間に行われ、指定された時間に発表者がポスターの前に立って質疑応答を行うフリーディスカッション形式であった。またセッション中は参加者に軽食や飲み物が提供され、気楽な雰囲気でのディスカッションが展開されていた。

私は 7・8 日の 2 日間に渡り、「Increased seizure sensitivity in *PHD finger protein 24 (Phf24)*-knockout rats」という演題でポスター発表・ディスカッションを行い、幸いなことに、私の発表内容にいくつかの質問や意見を頂くことができた。しかし、上手く英語が聞き取れず質問頂いた内容を何度か聞き直すことがあったり、それに対する回答をスムーズに伝えられないことがあったりと、反省点は山積みであった。また他の発表に対しても、英語が苦手であることを理由に自ら積極的に質問をすることをためらってしまい、国際的な知見を得られる貴重な機会を十分に活かすことができなかった。



ポスター発表の様子

4. モントリオールについて

モントリオールはカナダの中では東側、アメリカ合衆国との国境に近いところに位置する。カナダ・ケベック州の最大都市であり、空港や鉄道・バスなどインフラも充実している。「北米のパリ」とも称されるモントリオールでは、フランス語が公用語として定められており、それに準じた法律なども存在するため、実際に私が街で見かける文字はほぼ全てフランス語表記であった。一方で、英語も話せるという人が多く、飲食店などでは英語を併記していることもあった。このように、モントリオールはフランス文化の影響を強く受けており、街並みや建物は本場のフランスさながらであった。



左;モントリオール・ノートルダム聖堂(Basilique Notre-Dame de Montréal)



右;食料品のマーケット(Marché Jean-Brillant)

5. 終わりに

今回の国際交流事業は、私にとって初めての海外渡航かつ国際学会における発表であった。学会発表だけでなく街での買い物や挨拶でさえも、英語で自分の意思を伝えることの難しさを痛感した。しかし、この経験がきっかけで、研究の世界で生きていくためには英語は不可欠であることを再確認し、自身の英語技能をより高めたいと考えることができた。もし今後、再び国際学会で発表する機会があれば、より良い発表・ディスカッションができるように、日頃より英会話能力の向上に努めたい。

最後に、今回の国際交流事業を助成下さった大阪薬科大学国際交流基金に厚く御礼申し上げます。また、学会にご同行頂き、研究発表や渡航、現地での活動をご支援下さった大野行弘教授、清水佐紀助教に心より感謝の意を表します。また、その他様々な面でサポート頂いた方々に深く感謝致します。